

かたしほの宿

兵庫県知事 阪 本 勝

播州竜野は、兵庫県下で私のいちばん好きな町である。私の随筆集「知事の手帖」にもこの町に対する私の愛着が綴られている。多くの偉大な文人、詩人、哲学者を生んだふしぎな城下町である。

桜並木の堀割りがつづく片側道に、くずれかけた白壁の土塀がひっそりとならんで、どこからか、琴のそら音がきこえてくる。

この町に梅玉という有名な旅館料亭がある。30余年来、私はこの宿のファンで、何べん訪ずれたかわからない。宿の家族の人々ともみな懇意で、泊るとわが家

にいるような気がする。このまえ泊ったとき、玄関のあたりからやわらかな鳩の啼き声がきこえ、明るい陽ざしの障子に、さやさやと竹の葉ずれがなっていた。

この宿の広い静かな庭に、いわゆる「かたしほの竹」というのがある。めずらしい竹で、現に全国でここだけしかない。もとは淡路島の「しほちく」であるといわれる。幕末のころ、淡路の藩主脇坂侯がこの竹を愛して庭前に植え、門外不出を厳命して秘藏した。たまたま脇坂藩が淡路から竜野へ国替えになったとき、現

にあるこの庭に移植されたものときいている。

この宿の床柱にも、この竹の見事なのが使っている。

「この竹のタケノコを食うと腹がいたくなるぞ」と、おどかして、この宿の先代はいっしょうけんめいにかばい育てたのだそう。なかなかユーモアを解する茶人だったらしい。だが、今では国の天然記念物指定という保護政策があって、わが兵庫県の一つの名物になっている。

播州竜野——「ふるさとの、小野の木立に、笛の音のうるむ月夜や、少女子はあつき心に、そをば聞き涙流しき……」という竜野の生んだ大詩人、露風の詩碑とともに、私はかたしほの宿のあの竹の叢林に深い詩情をおぼえる。この宿を訪ずれる雅客たちは、どうか庭においてこの竹を觀賞し、いつまでも、成長を続けるよう願ってやってほしいと思う。

日本一
かたしほの竹

文部省文化財審議会委員 東大名誉教授 本田正次博士筆（梅玉旅館蔵）